

目次

第一章 「教育」とは

| | | |
|----|------------------------------|----|
| 一 | 「寄り添う」とは | 12 |
| 二 | 職人的指導と教育的指導 | 14 |
| 三 | 人としての「自然治癒力」を生かした教育 | 16 |
| 四 | 「子ども」をどこから教育していくかを見極める | 18 |
| 五 | 理屈より感性を磨け | 20 |
| 六 | 心の対話教育 | 21 |
| 七 | 人間的な関係（雰囲気）が保てる教育 | 23 |
| 八 | 「教育者」発信ではなく「子ども」発信の教育 | 24 |
| 九 | スーパーキーに負けない上級生の育成 | 26 |
| 十 | 教育者は教育哲学を持たなければいけない | 28 |
| 十一 | 教育の世界は結果が出たからそれでいい、というものではない | 29 |
| 十二 | 教育は性善説が基本 | 31 |
| 十三 | 「教育」から放たれる光は、 | 32 |
| 十四 | 神々しいものではなく、いぶし銀の光が似つかわしい | 32 |
| 十五 | 毎日の教育は「フチ道徳」の繰り返しだ！ | 34 |
| 十六 | 自分の育てた「子どもの姿」は「きれい」ですか？ | 37 |
| | 教育的な関わりができているのか？ | 38 |

| | | |
|-----|---------------------------------|----|
| 十七 | 「子ども」を「子ども」としてではなく「人」として育てる | 40 |
| 十八 | 学びに向かう「子ども」の姿勢を感じ取って、教育できていますか？ | 41 |
| 十九 | 「子ども」の新芽は見えていますか？ | 43 |
| 二十 | 言つとかなアカンより言わんでもできる | 45 |
| 二十一 | 「子ども」が描いているイメージの共有 | 46 |
| 二十二 | 「子ども」を教育する教育者は「人を育てる研究会」の研究者である | 48 |
| 二十三 | 教育者は「〇〇してあげた」ではなく | 50 |
| | 「〇〇してくれた」に価値を見いださずべきである | |
| 二十四 | 「敬意」は「敬意」を持つてのみ払われる | 52 |
| 二十五 | 「向上心」は育むべきものである | 54 |
| 二十六 | 「ものを教える」プロではなく、 | 55 |
| | 「人を育てるプロ」が「子ども」を育てる教育者であるべき？ | |
| 二十七 | あなたの教育理念で本当に「子ども」が「よりよく」育ちますか？ | 57 |
| 二十八 | 教育することは商法に似たり？ | 59 |
| 二十九 | 集団を生かすには個人をどう生かすかにかかっている | 61 |
| 三十 | 「子ども」に任せる教育力 | 63 |
| 三十一 | 教育者は「子ども」に対する | 65 |
| | 「丁寧な関わり」より、「丁寧な見方」が大切である | |
| 三十二 | 「勝ちたい」よりも「負けたくない」気持ちを尊重 | 66 |
| 三十三 | その「ありがとうごさいます」に「心」はあるか？ | 68 |
| 三十四 | ドラマティックな教育を創造する | 69 |
| 三十五 | 「飼育」と「教育」の違い | 71 |

| | | |
|-----|-----------------------------------|----|
| 三十六 | 教育よりも共育 | 74 |
| 三十七 | 育てる基本は「責任を持たせる」ことにある | 76 |
| 三十八 | 「やり方」ではなく「向き合い方」を教える | 78 |
| 三十九 | 「厳しい教育」の必要性 | 79 |
| 四十 | 底力を出す教育 | 81 |
| 四十一 | 物事を教育的に考える | 84 |
| 四十二 | 「教育の特効薬」はないが、「より良い薬作り」には励まないといけない | 86 |

第二章 これからの「教育者」へ

| | | |
|-----|---|-----|
| 四十三 | 若い教育者の条件 | 90 |
| 四十四 | 若さの錯覚 | 91 |
| 四十五 | オリジナルに動け | 94 |
| 四十六 | 冷静に叱れる度量の広さ | 95 |
| 四十七 | 仕掛ける教育 | 97 |
| 四十八 | 「子ども」をどうマネジメントするか？ | 98 |
| 四十九 | 言葉は心に届き、褒めるは魂に届く | 100 |
| 五十 | 「この教育者の言うことは、聞いてみようかなあ」という関係 | 101 |
| 五十一 | 自ら育とうとする環境を整える | 102 |
| 五十二 | 短所を見つけて修正するエネルギーよりも 長所を認め、伸ばすエネルギーの方が効果的 | 104 |

- 五十三 待つ姿勢を極める 106
- 五十四 良き教育者とは「子ども」の責任にしない 108
- 五十五 教育者の向上心無くして、「子ども」の向上心は育まれない 110
- 五十六 「子ども」の心をつかむ話ができるか 111
- 五十七 「しんどい」と「やりたくない」は全く別 113
- 五十八 「子どもの真剣さ」を侮るな 115
- 五十九 顔色は何うものではなく感じるもの！ 116
- 六十 「子ども」一人一人をどのラインで 118
- 六十一 頑張らせるのが教育の良し悪しを決める大きなポイントとなる 119
- 六十二 「得体の知れない宇宙人」から「得体が知れる人」へと変えていくのが教育 122
- 六十三 何故勝てないのか？どこまで真剣に追い求められますか？ 123
- 六十四 将来「子ども」が、 125
- 六十五 「ここで学べて良かった」といえる教育ができていますか？ 127
- 六十六 「子ども」の「100」を知ろうとする必要があるのか 128
- 六十七 困っている「子ども」はまず見守る姿勢 130
- 六十八 サボりにもサボりなりの理由がある 132
- 六十九 教育者はアドバランを上げるのが好き 134
- 七十 教育の一步は、言うことを聞かせることか？ 136
- 七十一 「子ども」の心に染みる言葉が伝えられているか 138
- 七十二 「子ども」と接してのみ教育者の「教育力」は高まる可能性がある 138
- 七十三 「感謝」は「する」ものか「させる」ものか？ 138

第三章 教育者の錯覚

- 七十二 紙おむつが「子ども」をダメにする？
- 七十三 自分の都合で「子ども」を見るな
- 七十四 「子ども」側に責任を持っていくと楽になる
- 七十五 「子ども」の気持ちを教育者の都合で振り回すな！
- 七十六 手を貸せば貸すほど、「子ども」の「自立心」の成長を奪っていくと心得よ！
- 七十七 学校は「矯正施設」ではない
- 七十八 教育者は審判ではない！
- 七十九 結果優先で教育を後付けするような教育は教育的指導とは言わない
- 八十 指示することが多くなる程、成長の芽は摘み取られていく
- 八十一 平和ボケをしない
- 八十二 転ばぬ先の杖は必要か？
- 八十三 教育者主体の教育は、所詮その集団の人数分の一の考えに過ぎない
- 八十四 過剰な反応は誤った判断につながることも多し
- 八十五 「子ども」と同じレベルで話せる快感。「子ども」に指示する罪悪感
- 八十六 教育はYESマンの「子ども」を育てることではない
- 八十七 教育者の常識が「子ども」や
- 「保護者」にとつては非常識な事が多いとわきままえよ
- 八十八 日頃「子ども」の未完成な部分を悪く仕立てる思考を繰り返してはいないか？
- 八十九 目の前の「子ども」の「心の顔」は正しく見えていますか？
- 九十 「子ども」を「見極めよう」とする傲慢さ「寄り添おう」とする丁寧さ

第四章 教育者の働き方

| | | |
|-----|------------------------------------|-----|
| 九十一 | 「善」は強調しすぎると「軽」なる | 175 |
| 九十二 | 「子ども」の想いと温度差が大きすぎると、こちらの「意」は通じない | 177 |
| 九十三 | 「聞く」教育者と「聴けない」教育者はさして変わりない | 178 |
| 九十四 | 安っぽい教育をするな! | 180 |
| 九十五 | 間違った意欲の生かし方 | 181 |
| 九十六 | 素晴らしい教育理念も | 185 |
| | 現場教育者の捉え方一つで、言葉の羅列に過ぎなくなる | 183 |
| 九十七 | 丁寧さ(杖の使い方)の勘違い | 185 |
| 九十八 | 中学校の「朝練習」は日本の勤労・勤勉文化の礎である | 188 |
| 九十九 | プロの集団はその質を高められるが、馴れ合いの集団は同じ失敗を繰り返す | 190 |
| 一〇〇 | 面倒臭さの肯定論 | 192 |
| 一〇一 | 勝負の直前にバタバタするのは一夜漬けに同じ | 194 |